



自分本位にやりたいことをやる！
タイムリミットの宣告は、逆に
人生を見直すチャンスになりました

岸博幸

慶應義塾大学大学院メディアデザイン研究科教授

コメンテーターとして情報・バラエティ番組にも数多く出演。

政治や経済を歯切れよく解説し、お茶の間でも人気の岸 博幸さん。

昨年1月、血液のがんである多発性骨髄腫への罹患が判明。

医師から10～15年という“余命”を告げられたことで、

妥協のない人生を軽やかに楽しもうと、心に決めたと語ります。

Profile



岸 博幸 (かし ひろゆき)

1962年、東京都生まれ。1986年に一橋大学を卒業し、通産省（現経済産業省）入省。2001年発足の小泉政権下で経済財政政策担当大臣や総務大臣などの政務秘書官を務め、2006年に退官。現在は慶應義塾大学大学院メディアデザイン研究科教授。企業顧問やアドバイザーなども兼務する。『情報ライブ ミヤネ屋』（読売テレビ）、『全力！脱力タイムズ』（フジテレビ）をはじめメディアへの出演も多数。2024年『余命10年 多発性骨髄腫になって、やめたこと・始めたこと。』（幻冬舎）を上梓。45歳で結婚。中学2年生の長男と小学6年生の長女の父親でもある。

大好きな緑を眺めて過ごす 家での時間が活力源に

印象に残っている家といえば、官僚だった30代前半の頃、ニューヨークの国際機関に派遣されたとき住んだアパートですね。マンハッタンにあって、36階の部屋の窓からセントラルパークを一望できました。リビングから緑の風景がよく見えるところが非常に好きでした。あともう1か所。その時期アメリカ人の彼女がいて、週末はいつもニューヨーク郊外にある彼女の実家で過ごしていたのですが、そこが典型的なアメリカの大きな家で。リビングもすごく広くて、そのまま庭につながっていて、庭の緑が全部見えたんです。この2か所の記憶が鮮やかで、以来、緑が常に見える家がいいよな、家のサイズも大きいほうがいいよなと思うように。

昨年1月、多発性骨髄腫という病気が見つかったのですが、たまたまその直前にマンションを購入しました。それまでずっと賃貸住まいだったことに特段の理由はないんですよ。ここはと考える家が見つからなかっただけ。買う以上はとことん気に入った家と思っていましたので、4、5年は探しましたね。僕が家に求める条件は、そんなわけで、リビングが広くて、リビングの窓から緑がきれいに見えること。基本的にはそれだけなんです。希望の条件を十分に満たす物件が、偶然そのタイミングで出てきて。正直、非常に高かったんですけども、まあ、無理して買ってしまった（笑）。結果的にとても運がよかったと思います。

病気になって、家で過ごす時間は増えましたね。今後治療はずっと続きますので、仕事をそんなに詰め込まなくなったというのがありますし、あとはやっぱり、家が非常に快適なんですよ。緑の風景が一番よく見える窓辺に1人掛けのソファを置いて、そこに座るのが本当に好きですね。緑を眺めながら猫と遊んでいるのもまた楽しい。うちの猫はもう明確に、僕のが一番好きなので（笑）。あと、わが家にはハリネズミもいますからね。どちらもとても可愛いです。

住むところって本当に大事！ 自分が気に入った場所

に住んでいれば、そこで心底リラックスできますし、当然ながら、仕事の活力とかいろんなものにつながります。今の家に住んであらためて、やっぱり家というのは充実した人生のために重要だよなと実感しています。

人間、妥協が一番いけない！ 病気が僕に気づかせてくれました

もともとずっと健康だったもので、突然こういう病気を告知されて、あと余命何年とか言われてしまうと、当然ながら最初はそれなりにショックではありました。でも、いろいろ考えているうちに、これはこれで悪くはない。「残り10年」と思えば、ダラダラ仕事ばかりもしてられない。そこからは逆に、人生を楽しむということ、かなり意識するようになりました。

本来の僕は非常に自分勝手に、仕事にしてもプライベートにしても、好き放題やっていた人間なんです。それが、病気になる前の10年くらいは妥協ばかりしていた。自分がやりたいことよりも、家族や、仕事先との関係を優先していたんですね。これを死ぬまで続けたら、死ぬ瞬間にすごく後悔すると思います。それを反省できたという意味では、病気に罹ってよかったと思っています。今は、自分の中で意義を感じられない仕事は基本的に入れませんし、自分が好きなことは、家族をほっぽらかしてでもやる（笑）。例えば、20年来ファンをやっているアメリカのメタルバンドの“追っかけ”を再開。実際に海外までコンサートを観に行っていますよ。

仕事も、今やっていることの延長だけではつまらない。元来僕は新しい世界にどんどん飛び込んできた人間なのに、ずいぶん長いこと同じ場所に留まっていたなあ。これも反省点ですね。これからは、構わずそこも変えていこうと思います。

経済学では「サンクコスト」というんですけど、起きてしまったことは取り返せません。病気も同じで、後悔しても治るものではない。くよくよしてもしようがないというのは、当初から思っていたことですが、それに加えて、テレビでいろいろなバラエティ番組に出演させていただいている経験というのは大きかったなと思いま



す。芸人さんたちとも仕事させていただくなかで、彼らから、ハプニングをうまく楽しんで、笑いに変えていくことを学んだのが、今すごく役立っていますね。変化を恐れずポジティブに、どんなこともおもしろがっていいと思う。畑違いの世界でしたが、飛び込んでおいて本当によかった！ 非常にラッキーなことでした。

少しずつでも世の中を変えたい 日本はもっと良い国になれるはず

こどもの教育についても入院中いろいろ考えました。今の時代、どうしても親がこどもに干渉しすぎる。僕も、世間一般の傾向とは反対に相当厳しいほうではありますが、積極的にコミットしてきたんです。でも、甘やかすにしろ厳しくするにしろ、関わりすぎは、こどものためにならないよねと。思えば僕自身、中学2年のとき両親が離婚し、母親も仕事が忙しかったので、自分で全部考えて決めてきましたからね。結果的にそれがよかったよなと思ひ至り、最近はなるべく口を出さない方向で、こども自身に考えさせ、決めさせることをメインにするよう、徐々に変えていっているところです。

家族で過ごす時間とか、これまでも特に意識してきたわけではないのですが、長野県の山のほうに別荘があるので、そこでみんなでゆっくり過ごすということはやっていますね。都会とは正反対の環境、虫や野生動物がいて、夏は草刈り、秋は薪割り、冬は雪かきが必要といった自然を経験させるのは、こどもたちにとっても大事なことだと思っています。

今の時代の生活はどうしても便利になりすぎちゃって、人間が逆にダメになると思うんです。スマホを使いすぎると自分で考える能力が落ちますし、エアコンに頼りすぎると温度調節機能が失われる。地球温暖化は深刻ですから、企業や政府レベルでは一生懸命、脱炭素とかSDGsとかに取り組まないといけませんが、個人レベルでは、あまり難しく考えず、ちょっとだけ便利にしすぎない生活に戻して、人間の本来の能力や野性を維持することのほうが大事なんじゃないかな。そういう意識を持つくらいで十分。僕自身が昔、ロッククライミングをずっとやっていた経験からもそう思います。

もともと長らく政策をやってきた人間ですので、自分が一番得意なのは、やっぱり世の中を変えるという部分だと思っています。正直なところ今はおかしい政策が増え、日本全体があまり良い国と言えなくなってしまった部分が多いですから、そこを少しでも変えることに関わっていきたい。日本をもっと良くするのが残り人生でやるべきことと考えています。

体調はそれなりにアップダウンがあって、コントロールが大変ではありますが、仕事を入れすぎなければ何でもなる。そこは淡々と。でも食欲にわがままに。自分がやりたいこと最優先で、日々の“ハッピー”を追求し、人生を“エンジョイ”しようと思います。

インタビュー動画は住宅金融支援機構（JHF）
YouTube公式チャンネルでご覧いただけます
https://www.youtube.com/playlist?list=PLcbOj07XtnfKA4_r_69-mElwHrGxjyKXI

